

補説一 第一銀行および日本銀行の火災と防衛

―地震発生の日夜から翌朝へ―

九月一日兜町で激震から脱出し、しばらく第一銀行で避難した渋沢栄一が、飛鳥山の自邸へ自動車で送られたあと、日本橋区、京橋区、深川区など都心部は大火に襲われ、市街はほぼ潰滅した。ここでは渋沢栄一と係りの深い金融機関、第一銀行と日本銀行について火災の様相を把握したい。

同日家屋の倒壊や薬品等の顛落によって東京および市内では一三四カ所から発火し、その過半が火勢を増して、四十時間以上燃え続ける。首都を席捲する大火は五八火系、焼失総面積三千八百万平方メートル強と算定され、たとえば火系二八は日本橋本石町の薬品店で出火し、日本銀行や第一銀行を脅かした。① 東京市編『東京震災録』の総括的な火災記録を参照する。

関東大震災の火系

上記の五十八火系中、焼失面積百万メートル（凡そ三十万坪）以上の者は其数十三にして、火系四十九は第一に位し、本所区菊川町一丁目、二丁目両火元の合同より成り、始は北方に延焼せしも、後には東より東

① 東京市役所『東京震災録』東京市役所、一九二六年、前輯、一七一―二三頁。

南に転向し、北西の強風に乗じて一気に堅川以南大横川以東の地域を焼き払い、郡部に侵入して熄む。之に次ぐは火系二十八にして、日本橋本町本石町に起り、西北及び東南に延焼し、神田区の一部日本橋区の大部分を焼き、西北は高架線を界とし、北は神田川に至り、東南は大川に達し、南は京橋川を限り、一部は長駆して京橋区船松町に入る。京橋区八官町に起りし火は、東進して銀座通りを襲い、木挽町を経て築地へ入り、終に大川を越えて月島に至る者、火系三十四是也。下谷区入谷町の火は火系十六とす。北風に乗じて左右翼を張りて南進し、切通し厩橋間の道路に突出し、西は上野台を限り、東南は殆ど隅田川に抵る。火系三十六は赤坂田町及び新町より起東南に邁進し、芝区北部の中心地を突破して古川に達し、火系十七は浅草蔵前に始まり、南より西に向ひ、次で北西に転じ、浅草区の南部、外神田及び下谷の南半を焼きて、御成街道に出て、火系二十九は京橋区霊岸島塩町に発火し、北進して日本橋区に入り、転じて東に向ひ、大川を越えて深川に飛火し、遠く越中島に侵入す。此三者は其勢力殆ど相當る。①

こうした延焼の結果として、一日の夕刻から翌朝へかけて日本橋区では、三越等の巨大店舗や伝統ある魚河岸も潰滅した。この惨状を簡潔に伝えるのは、東京朝日新聞に付せられた『関東大震災記』である。

日本橋区の火災

① 『東京震災録』一九二六年、前輯、二三頁。

大廈高樓櫛比して繁栄を極めた東京に於ける富の心臓ともいふべき日本橋通りも下谷浅草方面を焼き尽した猛火の襲来と区内の発火により一日午後六時頃には猛火縦横に馳せ狂い既に鉄筋コンクリートの大建物の窓といふ窓より火を吹き始め八時には三越を十時には白木屋を焼き払い二日午前一時には第一相互と星製薬会社の付近に及び、丸善をも一紙にし、日本橋畔の森村、村井銀行等を灰燼に帰し三井物産三井銀行等も只形骸のみを止むるに至った魚河岸、青物市場は一たまりもなく焼け、避難民は河中の船に乗びのつたが火に絡はれて殆ど焼死す幸いにして日本銀行は三階の一部を焼失したのみであったが一方兜町蛸殻町の両市場も一面の火となり僅かに箱崎町の一部を残したのである。①

一、第一銀行の火災と防衛

海運橋袂の第一銀行本店も一日の正午頃激しい衝撃と余震に揺れた。しばらく小康を得て、早めに営業を閉める午後が、一九五七年刊行の『第一銀行史』においてつぎように記述される。

旧館新館共事なきを得、兎も角も営業を続けたが、電信電話全く普通となった上、其の後の頻々たる余震に最早店を開けて置いても客足もない状態であったので、各掛は一応の整理を終り、三、四時頃迄には漸次退行する事としたのである。

この頃すでに市中は余震に怯える群衆の間に火災が起り、相当の混乱があった。間もなく伊勢町付近の火

① 東京朝日新聞社編『関東大震災記』（朝日新聞付録）、一九二三年。九頁。

災は延焼の危険あり、同地支店の重要書類は本店金庫内に收藏されたいとの通報があり、一旦締めた金庫を開いて之を収め、その序に営業部の平常は出したままにしてある当座通帳をも收藏し、万一の場合に備えた。

このとき為替元帳等は既に一応の注意を払って金庫前の鉄庫に收藏され、鍵もかかって居たので、そのまま差置くこととした。併しかかる一応の用意はしたものの本店に火が移るなどは、当時誰一人夢にも思わなかった。それには絶対安全を信ずる建築である上に、約半年前の三月隣地株式取引所が火を發して、仮事務所の大半を焼失した際にも、当行は些の懸念さえなかつた経験が新しい記憶に残って居る。況んや市中全体から見れば、その頃各所に火の手が揚りつつあったとは言え、当行の周囲は幸いにしてそれらしきものは見えず、市の消防の活動にも未だ信頼を持って居たのである。①

しかし、地震の直後から各地で火の手が挙がり、兜町にも延焼の危険があった。漸次業務を打ち切るなかで、残留する銀行員は書類等の保全に全力を尽くすとともに、高樓から日本橋一帯の異常な状況を凝視した。吉岡義二の証言を主体として『第一銀行史』の震災記録はさらに続く。

午後に至って再度屋上に登った吉岡はその景観を綴っている。

「強い午後陽は天変地異に逢った街を平日の如く照らして居たが、どこかに不安が漲って緊張していた。

この時空に異様な入道雲が現れて呪われた都の上を魔のように覗き込んで、見る見るうちに雲か煙か解らぬ動き方を呈して次第に形を変え北の大空へ傾いた。」

この雲のことは震災を語る場合によく話題となるし、当日の写真を集めたものにも必ず入っている。巨大な入道雲であった。やがて火災による疾風が全市を吹きまくった。

「横浜方面にあたって黒煙が地平線から天に沖して居る。その影が品川の海に映って大島の三原山が活動して居るとも見えた。見渡す限り不安に満ち、街を縦横に走る消防自動車の吠えるやうな声が悲しげに鳴り渡る。疾風は高空の針金にヒューヒュー鳴って居る。

火事と海嘯の危惧に晒され交通機関も杜絶し、「これからどうなる事か誰一人予測も出来なかった」と書いているが、夜に入るとこの宿直の二人は全く火に取り囲まれて、僅かに生を求めて川に飛び込まなければならなかったのである。

それに至る迄に彼等は必要な措置をあます処なく行った。本館のシャッターをおろし大戸を閉ざして新館に移った。その頃は宿直員ふたりのほか数人の巡視や小使がいた。

火災が接近し来たり、夕食の握り飯を食う頃には茅場町の辺りまでも延焼し、避難者が群を成して外を通る。「近くの取引先や銀行の人の身内の人、株屋さん等集って来ては、手提金庫やら証券書類を何処でもよいから置かしてくれ頼んで」ゆくのであった。

六時頃になって、危険を慮って巡視等を退出させ、吉岡と早川と只二人残って銀行を守ることとしたのである。

「この時巡視が一緒に逃げないと危いと云ってしきりにすすめたが未だ吾々はもう少し形勢を見とどける必要があったので留まった。吾々が去った後はどうなる事か？この歴史ある建物をたやすく火に委かすのは忍び得ぬことであった。」

このようにして、只二人になってからも行内の監視は怠らなかつた。

「ふと開け放しの窓が二階あたりに残っては居はせぬか？窓の日覆の上に火の粉が燃えて居はせぬか？と二人手分けして大急ぎで之等を探べて閉めて歩いた。気が付くと四辺がひっそりとして居るので逃げ後れたかと思うとぞつとして飛ぶやうに下に降りた。」

逃れようとしたがすでに遅く、火はますます盛んになり、やがて窓硝子も破れ室までも熱風が荒んで来た。最後まで見届けて吉岡は窓から川へ飛び、早川は逃げないため窓から下りて川沿いにある砂置場の下にかくれて数時間を火と煙と闘いながら付近の板を集めて筏を作り吉岡を探そうとした。

やがて二人は幸運にも遭遇し、あまき刺え吉岡は海運橋の下で一人の老婆を救助していた。二人は頭へ水をかけては夜の明けるのを待った。

「朝の七時頃だろうか、遠からぬ付近に人声が聞えだしたので、また石垣を登って川を出た。熱風は焼原を自由に吹いて居た。自分は温床のやうな石橋に腹ばいになって一夜水につけた腹を温めたり、聞かなくなつた眼を指で押し開けてあたりの光景を眺めたりした。やがて銀行の人々が変わり果てた吾等の姿を橋の上に見出し無事を喜び合った。」^①

その朝ようやく頭取佐々木勇之助はじめ数名の行員が駆けつけ、眼と脚に火傷した吉岡を病院へ運ぶことになった。『第一銀行史』にはこうした同僚の証言も付記される。

翌朝の模様を酒井杏之助は語っている。

「私が翌る朝早速かけつけてみたら、すっかり焼け落ちてしまっていて、吉岡君が印絆纏をきて、橋の所に行つて立っています。目が見えない。灰が目の中に入ったのです。私が連れて行こうとしている所へ、佐々木頭取が車に乗って海運橋の所へ来られた。それで佐々木さんはまさか焼けるとは思はなかつたでしょう。じつと見ておられた。まわりのの人が、郵便局の貰い火で屋根から火が入ったとか、やれこうなれば焼けないで済んだとか、いろいろな事を言っていました。頭取は黙って何にも返事をしないで、むずかしい顔をしていた。これでは営業場は古河の所に頼むよりしようがないなアと独り言みたいに言っておられた。私はそのとき（すぐ吉岡君を連れて帰りたいと思いますが）と言うと（うん）とただ肯いておられた。私は吉岡君を連れてずつと歩いて、慶応病院に入れたのです。」

酒井は吉岡を或る時は背負い或る時は手を引いて信濃町まで行った。

当日青山寮に吉岡等と共に居た喜多野章吾は当日の模様を次のように語っている。

「九月二日早朝、私共青山寮の者に知らせがあり（略）私と外に誰か二人程で直ちに救援に向うこととなり、握り飯、眼薬、座布団、及水筒等を持参したと記憶しています。途中はまだ所々燃えており、煙と悪臭が甚だしく眼にも沁みて涙が出ました。呉服橋の辺の道路には裸体の焼死人もかなり横たわりおりました。

本店建物は無事、本館建物は外回りがそのままの姿で屋根はありませんでした。

吉岡、早川両君は海運橋の上にシャツとパンツだけで横臥し、傍には老婆も一人寝ており両君に助けられたことを私共に繰り返して申して感謝していました。

本館横には幸に水道管が露出し水が流れておりました。これで手拭等を湿して両君の顔や眼等を冷やすことができました。持参した握り飯はとり出したら忽ち通りがかりの罹災者が寄って来たため老婆には充分差し上げられませんでした。（略）

現場に居合わせた人々は兎に角吉岡、早川両君を分担して救出すること相成り、酒井さんと私と、も一人若い人で吉岡君を病院へ連れてゆくことになりました。それで酒井さんは吉岡君を種々介抱され、又レ手拭をとりかえたり、足を拭いたり、又足に布を巻いてあげたり等致された様です。火傷は目立ちませんでしたが、何しろ素足では危険な焼跡を通って病院迄は到底無理でしたから、持参の座布団を解いて綿を厚く足をくるみ、上から布で巻いたのですが、途中何回もやりかえなければなりませんでした。それを道端の人々は大火傷している様に思つて大変同情してくれましたのを覚えています。兜町から信濃町の慶応病院迄は仲々道も遠く相当の努力でありました。何しろ吉岡君は半分疲労している上に眼があげられませんでしたので、酒井さんは吉岡君の脇の下に自分の肩を入れ背負う様にして歩いてゆかれました。当初は赤坂見附坂上の順天堂病院を目当に安全の道を選んで通り、弁慶橋迄参りますと、相憎赤坂見附は今火が出たという所で混乱している最中でした。已むを得ず麴町方面へゆくことと致したところ此の方面も火事とのこと、そこで信濃町の慶応病院迄歩くことと致し、外濠に沿つて四谷方面を迂回して左門町の方から行ったのであります。私は門前で別れて吉岡君の着替えをとり青山寮へ引返したのですが、酒井さんは入院手続等一切済ませて自

宅へ帰られた模様でした。

私共は相当早く本社へ到着したつもりでしたが、すでに二三人の行員が本社の安否を気にかけて現場に來て居て、両君の世話や後から來た人々に種々連絡していた。私共は同寮の友人を救うため通知を受けてから出掛けたのですし、又皆まだ家庭を持たぬ身軽の單身者でしたが、一般行員があゝの未曾有の震火災で尚所々に發火し、余震が続く、大混乱の中を遠方から徒歩で逸早く駆付けたということは余程の努力であったと存じます。」

後に当行は仮営業所へ移ったが、それと共に洪沢事務所も同所に移った。後日吉岡が洪沢栄一に詳しく当夜遭難の様様を語り、「あの時は逃げおくれたのです」と告げると、洪沢は吉岡の謙遜をたたえて論語の次の一句をあげて称讚した。

子曰、孟之反不伐、奔而殿、将入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也 ①

第一銀行を防衛した吉岡の献身と謙遜は、『論語』の章句を挙げて称讚されたが、洪沢自身によって他日なされたその講釈をここに併記する。「孟之反は人と為り謙遜にして、自己の功績を誇るることなし。魯の哀公十一年に斉国書高無平戦を率いて我を伐つ。我師を出して之を禦ぎ、郊に戦い、右師敗走す。此時孟之反殿りにして敵の追兵を防ぎ、全軍を護衛して還る。既に魯都の城門に入らんとする際、其馬に鞭をあてつつ人に語りて曰く。

① 『第一銀行史』上巻、九四三―九四六頁。

吾が後れたるは敢て殿りしたる為めにあらず、馬が疲れて進まぬ為に外ならずと。以て己れの功を掩へり。尋常無き功を誇りたがるものなるに、殿軍して大功のあるを自ら掩うて人に知らせぬといふは、その人物の大にして心平生なるを見るべきなり。故に孔子之を称揚せられたるなり。」①

この銀行では多年にわたり構成員の修養と鍛錬が重視され、若輩のため学習部と倶楽部が設けられた。そうした勉学と訓練に兜町事務所の二階が供されるとの記録が、明治三四年の『龍門雜誌』に見出される。

第一銀行学習部及倶楽部の設置

▲学習部 第一銀行にては予てより頭取を始め重役其他重なる行員間に於て同行見習生にして尚ほ普通教育をすら完ふせざる少年子弟が種々なる事情の為め業に従ふあれば、此等少年者の為め読書、算術、作文、習字、英語、簿記、銀行実務及法律経済の大意を教授し、行く行くは十分なる銀行員たらしめんとの議あり、又教員としては同行内に於て内外大学及び高等商業学校等を卒業し、或は実務に熟練せる人物のあるにも拘らず、教場に充つべき場所のなき為め、今日まで其目的を達する能はざりし処、去る五月幸にも同行頭取たる青淵先生王子の新邸に移転せられ、兜町旧邸の二階全く不用となりたれば、先生に乞ふて之を借受け、去頃以来委員を選び其設立の準備を為し、愈々去る六月五日開校式を挙行せられたり、当日は第一銀行重役諸氏の演説あり越へて同月十一日には青淵先生も亦教授の状況を參觀せられて且つ一場の訓戒的演説を為され

たり、教授科目は普通科と専科に分ち、普通科に於ては英語、読書、作文、習字、算術、簿記、銀行実務、法律経済の大意等を教授し、専科に於ては各人の好む所に従ひ一定の科目を特別に教授しつゝ、あり、目下生徒は三十四名の多きに達せりと云ふ。

▲倶楽部 又第一銀行々員諸氏間には予てより一方に於ては能く勤め能く励むと共に他方に於ては行員身体の強健を計り心気の活潑を期するが為め運動機關の設備を為さんと一般の希望する所なりしが、今回右学習部の為め青淵先生旧邸の二階を借入れたる処、尚ほ巨多なる空室を生じたれば、其一部分を借用し、一の倶楽部を組織し、月々の経費は会員より支出する会費を以て之を維持し、上下相混交し等級差別を立てず、和氣霽々の間に楽を俱にし、身体の強健と終日簿書場裡に駆して疲労せる精心を養ふ機關とし、先頃以来設立の準備に取り係出席り居りし処愈々去九月二日開館式を挙行せり、当日は青淵先生にも出席せられ能く勤め能く励み且つ衆と楽を俱にし心身の強健を計る是れ最も好愛すべき事なりとの意にて一場の演説を為されたり、目下倶楽部の設備は玉突、ボートの両部並に碁将碁等の備あり、且つ又内外圖書の閲覧及部員の談話休息等の為めに談話室の設ありて頗る整頓せり①

二、日本銀行の火災と防衛

一八八一（明治一四）年大藏卿松方正義はベルギーの金融制度を範として中央銀行の創設に着手し、日本銀行

① 『龍門雜誌』第一六一号（明治三四年九月）、第三九一四〇頁。『渋沢栄一伝記資料』第四卷、六〇四頁。

条例を公布するとともに、創立事務委員に大藏少輔吉原重俊、大藏大書記官富田鉄之助、大藏権大書記官加藤済を、また御用掛心得に第一国立銀行頭取渋沢栄一、第三国立銀行頭取安田善次郎、三井銀行副長三野村利助を任命した。① 翌年の十月十日日本橋箱崎町の仮営業所においてわが国初の中央銀行が開業する。この日「大書記官加藤済は日本銀行管理官を申し付けられ」、「第一国立銀行頭取渋沢栄一、第百国立銀行頭取原六郎、川崎銀行頭取川崎八右衛門の三名が割引委員に選任された。」日本銀行設立の意義は、「通貨制度を全国的に統一し、価値の安定した通貨を流通させる制度的基礎固めができたうえ、近代的銀行制度の革新となるものが設けられたこと」にあるとされる。通貨制度の統一と兌換制度の確立が商品交換を基本的前提とする近代経済の発展にとつて不可欠だからである。② なお、これに伴う法令の改正によって、民営の第一国立銀行は第一銀行と改称した。永代橋袂の仮営業所で発足した日本銀行では、まもなく本店への建築と移転が計画された。江戸時代に金座が敷かれた常盤橋袂、日本橋本町一帯がその敷地に選ばれ、設計のため建築家辰野金吾は欧米諸国の中央銀行を視察する。こうしてネオバロック様式の大建築が七年余の歳月をかけて完成し、落成式のときまで「高い板塀で隠蔽される。「地下一階地上三階建ての石積みレンガ造りの建物」が姿を現した時、二〇〇〇人を超える来賓は白い

① 「日本銀行の成立」ほか『青淵先生伝初稿』（大正八一二年）第九章下、四二一五一頁。『渋沢栄一伝記資料』第四卷、四四九一四五〇頁。

② 日本銀行編『日本銀行百年史』日本銀行、一九八二年。第一卷、一三二一―一三三二、一三三七頁。

花崗岩のまぶしさとその偉容に感嘆の声を上げた」①

大震災による施設の被災について『日本銀行百年史』の記述はかなり簡略である。「本行本店も関東大震災の被害を受けたが、地震そのものによる損害は当時新築中で落成直前であった北分館（鉄筋造り、地階とも八階）のみにとどまった。しかし、地震当日の夕刻から夜半にかけて西方と北方から延焼してきた火の手に襲われ、まず西分館（素銅ふき石造り二階建て）が焼け、次いで東分館（スレートふき、れんが造り二階建て）も焼失した。石造りの本館（現在の旧館）は猛火によく耐え夜半過ぎまで別状なかったが、ついに八角室塔屋および東方に面する三階の明かり取り窓から火炎が内部に入り、三階のほとんど全部と二階・一階の一部を焼き、九月二日の正午ごろようやく鎮火した。三階の調査局と公文保存室は可燃物が多かったため全焼し、創業以来の貴重な諸記録の大半が焼失した。」②

しかし、日本銀行の被災と防衛については、当時の理事深井英五によって詳しい証言が遺される。若き日同志社で新島襄の薫陶を受けた彼は、国民新聞社で編集を担当したのち、徳富蘇峰の推挙により一九〇一年日本銀行に入った。以後彼は金融界を代表する一員として一九一八年パリ講和会議へ随員とした参加し、その三年後にワシントン軍縮会議への全権団にも参加した。深井による自伝『回顧五十年』の第十八章「関東大震災」を参照する。

① 中村茂樹「日本銀行の建物―その歴史と変遷について」『にちぎん』第二五号（二〇一一年）、二〇―二三頁。

② 『日本銀行百年史』第三巻、四九頁。

日銀理事深井英五の被災回顧

大正十二年九月一日関東大震災火災のとき、日本銀行の重役中東京に居たのは井上総裁と私とだけあった。私は理事室の席に在って最初の大震動を受けた。椅子に居たまま机に体を支え、室内ではシャンデリヤも大きく動くのを見、外には物の崩れ落ちる音を聞いて、是れは大事だと感じた。一寸書類を整理してから、廊下に出たが、何の異変もない。露台から外を眺めて、崩れたのは行外の家屋であることを認めた。間もなく井上総裁が応接室から出て来て私と一緒に諸部局の報告を受けたが、行内は何処にも大なる破損はなく、事務は平生通り執行し得ると云うことであった。そこへ山本権兵衛伯から使が来て急に井上氏を招いた。伯は加藤友三郎男の薨去後大命を受けて組閣中であつたから、井上氏に入閣を求むるのであるかと直に想像された。格別差迫つた行務もないので井上氏は招きに応じて出掛けて行つた。

其日は土曜日であつたから、午後一般の業務はない。只地震が正午近くに起つたので、手形交換の結末がまだ付いて居なかつた。之を処置するのが当面の急務であつた。銀行業務の手続を知る人は直に其の理由を認めるであろう。まだ交換尻を日本銀行に振込まないものが多かつたから、正規の手続によれば交換不成立となるのである。然しそれでは災害の最中各銀行に大なる混雑を加えることになるから、日本銀行では仮に交換が成立したものととして各銀行との関係进行处理することにすべきだと、井上総裁の意見を待たずして私は決心した。それは交換所の規則に反することだから、成るべく交換所委員長の了解を得、且後日整理の責任を執つて貰いたいと思つた。営業局調査役田中鉄三郎が其の交渉に當つたが、交換所委員長池田謙三氏の

居所を探がすに手間取って。漸く夕方に決了した。

井上総裁は日本銀行に帰って私と共に部局長と協議し、月曜日より臨時措置を要することあるべき事項を予想して手筈を定め、尚日曜日にも参集して、事態の推移にも応じ遺漏なきを期すべきこととした。火災は諸処に起って居たけれども、日本銀行は耐火の設備が充分だと信じて居た上に、一方は外濠に面し、近傍は概して石造の建築であるから、火災の迫り来る様子はなかった。夕刻に至り、最早処置すべき用事もないので、多数の臨時宿直員と守衛小使の全部とを留めて警備に当らせしめ、井上総裁も私も一応退行した。帰宅して見たら、私の住宅に格別の被害はなかった。

然るに翌二日の未明に、日本銀行から急使が来て、火災の本館に及んだことを報じた。私は直に有合の朝食を喫し、近所の井上邸に馳せつけて打合を遂げた。井上総裁は万一の場合の為め陸軍工兵の派遣を頼んで置くのが宜しからうと云ってその手配に廻はり、私は真直ぐに日本銀行へ向った。途中宮城前芝生に避難者の充満するのを見た。呉服橋に近付いたら、日本銀行の正門に倚って死んで居るのも一人あったので、行員ではないかと特に心を痛めたが、後に点検の上行員は悉く無事なりしことを確かめた。前夜日本銀行の前庭に避難した人が多かったから、其中の一人が火に襲われて逃げ得なかったのであろう。

外濠側の面に近寄って見ると、銀行の内部には処々赤い火災がきらめいて居る。消防車が一台、濠の水を窓から中に注いで居たが、建物が広いから効果が少ない。行員も段々参集して多数になったが、何等手の下しようがない。井上総裁は少し後れて来著し、工兵も程なく来て、午後まで居て呉れたが、消火の為に建物の一部を破壊すると云う如き必要はなくして済んだ。

兎に角消防車の数を増して火の手を抑えるの外に手段はない。それを頼むには、成るべく地位の重いものが宜しいと思つて、私は警視庁消防係との交渉を引受けた。日本銀行の自動車は悉く焼けて仕舞ひ、私の自動車は其特別の行用に使はれて居たので、帝国劇場の傍らにあった消防仮屯所まで徒歩で行く。かういふ時は身辺を莊重にしなければいけないと云ふ井上総裁の注意で、庶務係渡辺次郎氏及び守衛小使を伴い、肩書付の名刺を出して懇請した。消防車は三台あったが、消防手は疲れはてて居るし、日本銀行はもう駄目じゃありませんかと云って中々乗り出して呉れない。私は更に語を尽くして曰く、日本銀行は石造で内部が細かく仕切つてあるから、火の廻りは遅い、今の内肝要の部分を消し止めれば明朝開店が出来る、若し開店が出来なかつたら、全経済の停止で官民共に災害の手当にも差支えるから是非奮発を願いたい。頭らしい人は之に感奮したものの如く、それぢやあやりますと固い決心を示して起き上り、消防手を指揮して後から行くと云ふ。私達は、後からでは困まる、支度の出来るまで待つて消防車の隅に乗せて貰つて行くと頑張り、居催促で、三台に同乗して日本銀行に着いた。

消防手は長い水筒を窓から差入れ、之と共に火中に入込んだ。暫くにして頭らしい人が出て来て廊下は防火衣なしに這入るだけに鎮火したから、どの室が大切なのか、責任者の指示を得たいと云ふ。此時井上氏は「俺が這入る」と云つて先に立ち、私と営業局書記平林襄二氏とが之に続き、斜めに渡した板伝ひに館内に入った。私は其時指に微傷を負ひ、ハンケチで血を抑えながら廻り歩いた。廊下はまだ焼けるように熱く、上階に注がれた水が熱湯のしづくとなつて落ちて来る。貴重の有価物は地下の金庫に格納してあるので心配はないが、業務に必要な各局の常用帳簿等を保全することが私達の希望する眼目であった。

消防手は全力を尽くして働いて呉れたが、聞けば昨夜米飯を喰べないといふ。そこで井上邸と私の宅とにあるだけの米をたき出して自動車で運ばせた。そこで又自動車を走らせて両家の車庫にあるガソリンを全部

取り寄せた。午後二時に至り、火は消え切らないけれども。最早燃え広がる惧はなく、指示された場所は安全になったと云ふ報告を消防手から受けた。消防係の人達は、日本銀行の救火が災害の手当及び一般経済の進行に大関係のあることを理解して、真に献身的に努力したのである。私は深く感謝して忘れない。〔中略〕

井上総裁は鎮火の模様を大蔵大臣に報告する為めに出掛けた。其の留守に後藤新平伯が来て私に会い、井上さんは山本内閣の大蔵大臣に推薦されたから早速組閣本部に来るよう伝えて呉れと言いついた。その晩井上総裁は之に応じて日本銀行を去り、其の晩親任式があつて、震災の混乱中日本銀行には総裁がなくなつて仕舞い、五日夜市来る乙彦氏が総裁に就任するまで、私一人で臨機処理の責任を執つた。①

なお、震災の翌年東京府により編纂された『大正震災美績』には、救命・防火に尽力した個人や団体の美談が、二百件あまり集録されている。これら「一大美績」のうち「職務及ヒ責任觀念ノ上ヨリ、其ノ私ヲ忘レテ公ニ竭シタリシモノ、冷静沈着ニシテ処理ヲ誤マラサリシ」事例のひとつとして、無署名の記録「日本銀行を救つた殊勲者」が見出される。② 井上総裁の尽力など深井英五の回顧と重なる部分もあるが、ここではまず一介の行員渡辺次郎の献身が称讃される。

① 深井英五『回顧五十年』岩波書店、一九四一年。二〇一―二〇七頁。

② 東京府編『大正震災美績』東京府、一九二四年。二頁。

「日本銀行を救つた殊勲者」その一

一、責任觀念深き渡辺君等の活躍

三井銀行、三越呉服店、同別館等東京否東洋の代表的大建物が揃いも揃つてあの大震災のため猛火の犠牲となった間に立つて只一つ日本銀行が僅かに三階調査局を焼いたのみで一般の如き大損害を免れたことは注目すべきことだ。

恐怖におそはれた九月一日の夜は明けたが下町方面は炎々として燃えつつある噂は口から口へ伝へられた。大蔵省が焼けた。文部省も焼けた。印刷局も鳥有に帰した。而して金城鉄壁と信じた日本銀行も亦今類焼しつつあるとの噂を耳にした時間く人何れも戦慄を禁じ得なかつた。大震災の損害は莫大である。各官庁、会社、銀行、商店の焼失はそれぞれ怖ろしい大損害である。併し国家経済の大局から観ればなお部分の損害たる感がある。之に反し日本銀行が印刷局と共に焼けたならそれこそ重大な問題を惹起したに違いない。実に我国をして経済上財政上大混乱に陥れ正に産業界の根本的破壊である。

すでに三階をなめ始めたあの猛烈な火勢が如何にして止まったかが不思議？ いや不思議でない。そこには重大な責任の岐路に死を賭して働いた井上総裁始め渡辺庶務主任、守衛小使等の殊勲者が居つたためである。

さて日本銀行は今回の大地震に逢つても一条の亀裂も生じなかつた。総裁以下の重役は銀行に被害のなかつたことを互に心から喜び火災に対しても絶対に安全であるといふ深い自信の下に午後四時頃帰つたのである。他の行員も総て各我が家をさして帰途を急いだ。然るに此時奮然一人居残つた人が居る。それは同行庶

務掛主任渡辺次郎という人である。君は局長に申出て曰く「自分は本日非番であるが庶務掛主任として警備のため残りたい」と許可を得て率先今後の警戒に任じたのであった。守衛小使等も各我が家を索する余り帰宅を乞ふ者さへあった。此時渡辺君は守衛小使に宣言して曰く「日本銀行は耐震耐火ではあるが、万一火が這入るったら大変である独り日本銀行の損害に止まらず、実に国家的機関としてその損害の波及することは甚大で計り知れない。故に自分も居止まるが諸君の中非番の者も一人なりとも此際帰宅は許されぬ云々」と挺身七十有余名の守衛小使を率いて徹宵警備に尽力する様激励したのである。丁度午後七時頃である。大蔵省は既に猛火に包まれ、帝劇は過半焼け落ち夕暮の帝都は炎々として各方面に燃え上る猛火が空にうつり物すごき極みであった。

七時から八時の間であった。内務省大蔵省方面の火の子は神田方面から舞い狂い、付近三井三越の火も折柄の烈風に紅々と燃え狂ふに任せてある。同行庭に雨の如く降りしきる火の子は遂に銀行三階の調査局上の塔に燃えついたのであった。

これより先渡辺氏は既に危難が迫ったと感知したので防火作業の第一歩として本館別館内の窓硝子シャッター全部を閉鎖させることにした。平素閉鎖せぬ所は臨時大工、人夫迄雇ふて数多いシャッターを漸くにして閉め終らせた。次いで貴重帳簿類テール絨毯等安全地帯に運んだり、或いは発火延焼をたたき消す等卒先部下を激励したのであった。当時水道は全く断え防火作業も僅かにバケツの水のみであった。ガソリンばんぶも水が尽きて如何ともすることが出来なかつた。

渡辺氏は始め西分館に本拠地を定めたが火に包まれたので東分館に引き上げた。然るに東分館も焼けたので八時半頃本館に引き上げた。貴重帳簿の運搬や防火に極力務めてみたが折柄八角塔に燃えうつつた火が益々猛く火の子は二階に迄落ちて来た。黒煙は濛々、火花は散る。本館内の人々はとても目も開き得ず窒息せん許りであった。渡辺氏は此時衆を本館外電車通り側へ誘導避難させた。火花到る処から飛んで来る。烈風はあふる。建物は燃え狂ふのみだ。然も水はなし如何ともする事が出来ない。渡辺氏は今は是迄と急を告ぐ可く翌未明伝令二名をして井上総裁、深井理事、川田理事、横辺局長まで急派した。丁度午前五時半頃であった。銀行の小使い二人は漸く命ながら井上氏邸に就いて「銀行に火が這入った」ことを告げたのであった。①

井上準之助は天領日田で酒造家の息子として生まれ、東京帝国大学の卒業後日本銀行に入行した。高橋是清の知遇を得てやがて営業局長へと昇進し、イギリスとベルギーへ留学する。第九代日銀総裁に就任した一九一九年、雑誌『実業之日本』には彼を紹介する一文が掲載された。「従来の日銀総裁は、」と寄稿者竹内金太郎は述べる。「多くは、官歴の見るべきものあり、然るに井上君は全く民業育ちにして、春秋僅かに五一歳、一躍してこの地位に達す。陰に同郷の先輩山本達雄氏の推挙によるもの多きは、云う迄もなかるべきも、畢竟君が天性の美德専ら之れが素をなし、以て今日の運命を開拓したるものとす。」「井上君の拔擢は一面には、日本銀行は従来の如く。官吏風殿様式の盲判にては、世界の大勢と推移するを得ず、特に欧州大戦の後を享くべき我国財政界の首脳たる日本銀行の総裁としては手腕あり世界の大勢に通じ盲判を押さぬ事実上の仕事師を以て之に擬するに

非ざれば、この時局を凌ぐべからざるの必要に駆られ、井上君の才華と人格を認めて之を登用したるのの謂うべし。」① 『大正震災美績』の記述へと戻る。

「日本銀行を救った殊勲者」その二

二、渦まく猛火をくぐって死守した井上総裁

本館に火が這入ることは決してあるまいと確信した総裁も流石にこの二人の注進に一驚し、直ちに自動車を銀行に走らせた。丸の内の凱旋道路にさしかかると自動車は陥没した道路の中に陥って動かない。気のあせった井上氏は止むを得ず車を捨てて徒歩でかけ出した。朝鮮銀行は既に焼け高田商会も亦焼けてゐた。そしてその前に停まてゐた電車は火焰に包まれ盛に燃えてゐる。

拂曉の丸の内は人の往来も少くただ猛火の炎々として天をやり爆発の音のもの凄くひびくのみであった。氏は呉服橋から日本銀行に近づいた。七層の雄大なりし三越呉服店は凄惨な爆発の音をひびかせて焼けつつある。三井の建物も燃えてゐたが日銀からは火焰を發していない。濠洲にいたって始めて三階が公正に燃えつつあるのを見た。内外共に熱しきつてゐるので水は湯となる有様だ。井上氏の来るのに先立ち深井英五外六の行員もかけつけてゐた。が如何ともすることが出来ぬ。元来日銀建物の中央頂上には、一基の裝飾塔があった。周囲は鉄で包まれてゐるが内部は木造である。付近の猛火が炎々として燃え上るに従い塔をつつ

① 『実業之日本』大正五年四月。井上準之助編『外遊所感』一九二五年。二九三—二九四頁。

だ鉄も亦高熱し内部の木材を焼き塔の崩壊とともに猛火は三階に向つて猛進し室から室へと豊富の可燃物をなめつつあったのである。火勢は猛烈である。このままに放任すれば国家社会の一大事であるを見た井上氏は直ぐに深井氏と渡辺氏を警視庁に走らせ、日銀今危険である、一刻の猶予もなく即刻全力をあげて消火に努めて貰いたいと依頼せしめた。総監も報を得て大いに驚き直ちにあり合わせの一台のポンプをかけた。次いで二台来た。四台のポンプは何れも最善の努力を以て一斉に濠の水を注ぎかけた。

井上氏は消防署長等に向ひ「三階はすでに火勢猛烈である。今はポンプの力を以てするも如何ともするとは出来ぬであろう。これは致方ない。併し行内の倉庫だけは、如何なる犠牲を払っても助けねばならぬ。印刷局が全焼した今日日銀の倉庫が火となつて兌換券を灰燼とすれば今日只今から経済の運行は停止し国家の財政経済に与ふる大損害は計るべからざるものがある。どうぞ死力をつくして日銀の倉庫を助けて貰ひたい」と兌換券の使命を説明し且つ懇請した。

署長は「能く分りました。死力をつくして大いにやります。然し私共にはその大切な場所の所在が分かりませぬ。従つて何処に主力を注ぐがよいか分かりませぬ。倉庫は何処にあるかそれを示して下さいと云ふ。よろしい己が案内するからと井上氏は自ら先頭に立ち署長筒先を案内し、深井氏と共に二階に上り一々重要地位を指示した。その時三階は燃えつつあって濠々たる黒煙は行内に満ちて一行を取巻き幾度か窒息の危機に逢ふた。筒先を揃えて注ぎかける水は熱火に逢つて土塵を交えた熱湯となつて一行にふりかかる。服はびしょぬれとまり身体に火傷したのもある。かくして四台のポンプは全力を指示せられた重要地点に集中し滝の如き水は一斉に同一地点に注がれた。〔中略〕

午後一時頃になつて署長は「もう大丈夫です。御安心下さい」といった。心配に心配を重ねて井上氏はこ

の時始めてホット安心して覺えず流るる涙をふるひつつ深き感謝の辞を述べ三時愈々銀行の安全なのを見、警視庁に総監を訪ねてその好意を感謝したといふ。

上は総裁から下は小使にいたる迄死守した効か将又天祐か大火災に逢ひながら全く同行は類焼を免れたのである。銀行は三日から常の如く業務を取り何百万円を払出し震災後の財政経済の大変に当り着々良績を挙げてゐる。これは独り日本銀行のみならず実に日本の名誉である。①

八月二四日総理大臣加藤友三郎の逝去を受けて、地震発生の直後海軍大将山本権兵衛を首班とする組閣が開始された。この内閣の中軸たる後藤新平の推挙によって、九月二日井上準之助が非常時の大蔵大臣に就任したことは、深井英五の回顧録で伝えられるとおりである。

① 『大正震災美績』三九五―三九七頁。